

安岡章太郎『舌出し天使』論

——岡部の〈義務と責任〉をめぐって——

大塩 香 織

はじめに

『舌出し天使』^①は昭和三三年「群像」に掲載された安岡章太郎の小説である。本作品発表前後の作品として『遁走』^②と『海辺の光景』^③がある。その二作品が高評価を獲得したのに対して本作品の評価は低い。その一因として、関谷一郎が〈安岡が自身（あるいは自作品の主人公たち）に近い〈弱者〉を服部の自殺行に見出し、創作意欲を刺激されたという実情があるにしろ、結果的には死者に鞭打つ行為に見えてしまう〉と苦言を呈したように、昭和三十一年に自殺した服部達をモデルにしている点が挙げられる。

安岡は『遁走』の結末に関して〈想いつきの域を出ない〉と弁明し^④、そのような結末となったのは執筆時期と母の危篤が重なったからであると語っている。死にゆく母を看ながら、安岡が想起したのはその前年に自殺した服部達の存在であった。服部達は遠藤周作・村松剛と「メタフィジック批評」を唱え、同時代の「第三の新人」を批評しながら、彼らとともに活躍した文芸評論家である。安岡は〈服部と私とは性格も資

質もまるで異質の人間である〉と述べている一方で、自身と服部に共通点を見出している^⑤。

しかし、服部を含めて、私たちの同年代の者には、あきらかに戦争によって内心に欠落したものがあり、それはいま母の死を前にした私自身の内面の空虚さと見合うものであった。勿論、それは、自身の努力によって補うことができることもあるし、歳月によって自然に治癒することもあるだろう。しかし服部の場合、その欠落したものを何とか補おうとしながら、かえって決定的に破滅させることになったと言えるのではないか。そして、そのような破滅を、私は死につつある母と見較べようとしていた。

安岡は服部や自身には〈戦争によって内心に欠落したもの〉があるといる。さらに安岡はそれが二者に限らず〈私たちの同年代の者〉全般に共通した問題であるとする。ここで言われる〈私たちの同年代の者〉とは所謂「第三の新人」を指している。安岡は同時代人が抱える〈戦争によって内心に欠落したもの〉による空虚の補填に服部は失敗し、それが

服部自死の原因であると理解しているのである。一方、服部は安岡の文学の出発点が〈自分を何よりもまず、怠惰な人間であり、卑小な人間であると見なすこと〉にあるとした上で、その作品を次のように分析している。⁷⁾

つまり、卑小なる自我という観念は、作品を書き出すための出発点であるのみならず、作者と等しい自意識を持つ主人公の独白にほかならぬ作品それ自体の、結論ともなっている。作者の自意識は、この作品を書くことによって、いささかも変化しない。そのことと対応して、この作品の主人公は、どこをどうさまよい歩こうと、つねに自分自身の反映をしか見出さない。言いかえれば、この作品の世界には、主人公から独立した現実それ自体というものは存在せず、主人公の心理によって歪められた現実の映像しか存在しないのである。

服部は安岡の文学を〈卑小なる自我〉の持ち主なる〈自身の反映〉であるとしている。いささか痛烈な批判であるが、この批判と呼応するよう安岡は『舌出し天使』の執筆当時を次のように振り返っている。⁸⁾

モデルにしたのは服部ではなくて、その性格の一部分——戦中派の内面の欠落したところ——であり、それを私自身の荒涼たる心象風景に託して語ることであった。

ここで語られる〈戦中派の内面の欠落したところ〉とは、前述の〈戦争によって内心に欠落したもの〉を指している。安岡は『舌出し天使』

で服部を通して自身の〈戦争によって内心に欠落したもの〉を把握しようとしたのである。平野謙は『海辺の光景』と本作品とを比較し本作品の失敗が〈服部達の死がどんなに著者に衝撃を与えようと、やはり母親の死とは質的にちがうという平凡な事実を、私は一結論として抽きださざるを得ない〉⁹⁾と安岡が服部達の自死と母親の死を混同した点にあると批判した。それでも、『舌出し天使』が安岡にとつて〈戦争によって内心に欠落したもの〉を描き出そうとした実験的作品であるならば、検討の余地はあるだろう。先行研究では服部達をモデルとしたことで本作品が非難の対象となったが、本稿では『舌出し天使』を〈戦争によって内心に欠落したもの〉を描こうとした物語として読み直すことで、安岡の〈戦争によって内心に欠落したもの〉の内実を考察する。

一．

『舌出し天使』は主人公である岡部が兼子と陽子という二人の女性に翻弄される物語である。そもそも陽子との出会いは、岡部がK海岸で同棲する兼子から脱走したことがきっかけになっている。その兼子との関係は性的な結びつきによって開始された。

兼子は承知して立ち上った。……僕はまだ椅子に腰かけたまま、彼女を見上げた。太くて短い二本の脚、その上に白地にバラの花模様のスカートが、まるで風にあふられたカーテンみたいにくらみながら揺れている。と、まるで突然のように嫂と別れたあとの空白感が体全体を通過して行くのが感じられた。僕は突嗟に膝から彼女を抱き上げて接吻した。彼女は二三度振っただけで眼を閉じた。

兼子と性行為をする直前に、岡部が感じたのは情慾ではなく（嫂と別れたあと）の（空白感）であった。岡部は以前、同居中の長兄の妻である嫂と（間違いを犯した）。翌朝、長兄にその事実を知られるのを恐れた岡部は（慙愧と羞恥と自己嫌悪）を感じる。しかし、その感情は長くは続かない。

はじめのうちはボンヤリしていると、つい嫂のことが想い出され、そのたびに僕は背中に針でも刺されるような劇しい発作的な羞恥心におそわれて、椅子から跳び上って奇声を発したりした。しかし日がたつにつれて、そうした発作はすくなくなり、おしまいには空に嫂の体つきを描いて愉しむようにさえなった。……兼子と知りあったのは、ちょうどそんなころだ。

岡部は（羞恥心）を継続して抱きながら、時間が経過すると（空に嫂の体つきを描いて愉しむようにさえなった）。（慙愧）と（自己嫌悪）は一瞬感じただのみで消滅し、残された（羞恥心）も持たなくなる。すなわち、岡部にとって自身と（間違いを犯した）嫂は（慙愧と羞恥と自己嫌悪）の対象から除外されるのである。その岡部の心情の変化には嫂の態度が関係している。岡部と（間違いを犯した）嫂の翌日の振る舞いは次の通りである。

午後おそく、兄がかえってくるまでの間、僕は慙愧と羞恥と自己嫌悪とにせめたてられながら、かろうじて家に踏みとどまっているのに、嫂はいつもとまったく変らぬソブリで、兄に對して、
「昨晚、透（子供の名）ちゃんは叔父ちゃまと一緒に寝ましたの」

などと云っているのだ。

（慙愧と羞恥と自己嫌悪）に駆られる岡部に反して、嫂は（いつもとまったく変らぬソブリ）を見せていた。岡部の（慙愧と羞恥と自己嫌悪）は兄の妻と（間違いを犯した）ことに對するものである。そこには（間違いを犯した）と自覚する岡部の意識が介在している。しかし、嫂は岡部のそのような感情を一切無視して、その行為自体をなかつたことのように振る舞つたのである。そのような嫂の対応によって、岡部の自覚した（慙愧と羞恥と自己嫌悪）も存在しなかつたものとして霧消し、嫂との性交は情慾のみが記憶される。そのために、岡部の（慙愧と羞恥と自己嫌悪）も持続し得なかつたのである。しかしながら、岡部が兼子との性交の直前に感じたのは（空白感）であった。これは嫂への情慾とは異なる感情である。この（空白感）とは、いかにして生まれたのだろうか。

嫂と（間違いを犯した）以前に軍隊生活を送つた岡部はその当時を次のように振り返っている。

その二年ばかりの兵営ぐらしの間に、僕はどうやら義務によりかかつて怠けるという技術を身につけたらしい。義務と責任とで動作の一つ一つを縛られた生活の中で、僕は自分自身に對しては何一つ「責任」を負うことなしにすごすことができるからだ。

岡部は軍隊での生活を（義務によりかかつて怠ける）ものと言いつている。岡部にとつての軍隊生活は（将校）としての（義務）を果たすことでその（責任）を負いさえすれば、（自分自身に對しては何一つ

「責任」を負うことなしにすこすこと」が可能であったのである。岡部はここで〈自分自身〉への〈責任〉から逃れることに喜びを感じている。これは嫂との性交が嫂によって隠蔽されたことよって、〈慙愧と羞恥と自己嫌悪〉が伴う〈責任〉から解放された岡部の心情の変化にも対応している。ところで、岡部はその軍隊生活を〈少年時代からずっとつづいて変らない〉とも言う。

想いかえすと退屈さ、あるいはサビシさという点では、現在の生活も、兵営のそれも、少年時代からずつとつづいて変らない気がする。少年のころでもい出すのは毎年、夏休みの宿題に追われたことと、はじめて海へつれて行かれたときの魅せられたような心持とだ。碎けて散る波と、山のように積み上げられている宿題帖、僕は兄たちと一緒に泳ぎに行っている間じゅうウラ半紙を綴じた分厚い帖面のことをかんがえ、宿で机の前に坐らされると白い帖面の家にはるかな水平線をおもった。……軍隊生活では、それが朝から晩までの命令と、「戦争がおわつたら」という漠然とした、しかしながら切実な願いとに変わった。

岡部の少年時代は〈夏休みの宿題〉と〈海〉に象徴された。前者は岡部に課せられた〈責任〉とそれに伴う〈義務〉であり、後者の〈魅せられたような心持〉はその前者に対峙する存在である。少年時代の岡部は〈海〉では〈夏休みの宿題〉を想い、〈夏休みの宿題〉の前では〈海〉を想像する。すなわち、岡部にとってそれらは対峙しながらも切り離すことができないものである。

これを視野に入れて兼子との関係を考察すると、二者はこの時点では

〈責任〉を伴わない関係にあり、それゆえ岡部は兼子に対して情慾ではなく〈空白感〉を抱いてしまったのではないだろうか。逆言すれば〈責任〉からかけ離れているはずの兼子との行為の背景に、行き場を失った嫂との〈責任〉が存在する。しかし、岡部は一瞬感じたその〈空白感〉の内実を無視し〈責任〉を伴わない兼子との関係を開始したのである。

二.

岡部の当初の思惑に反し、兼子が岡部と共有しようとしたのは夫婦の関係であった。岡部は兼子の要求を無視しながらも兼子との関係を解消しようとはしなかった。

それから、もう七年になる。……表面は極くくだらなく見えて、実は人生を決定する瞬間があるものだ。僕の場合、この「お子様ランチ」の皿に箸をもって行ったことが、それだった。拒否しようとするれば、あまりに簡単にそれは出来てしまう。だからといって、それを避けなければ結局、何も彼も受け入れてしまうことになる。この七年間、僕は絶えず兼子から逃げ出そうとし、兼子は餌でそれをつなぎとめた。

兼子との生活を岡部は〈拒否しようとするれば、あまりに簡単にそれは出来てしまう〉ものとして、自らに選択の余地があると認識していた。それでも岡部は〈七年〉もの間、その関係から脱出しようとはしなかった。言うまでもなく、夫婦生活とは単なる性的な結びつきのみでなく〈義務と責任〉が伴う。岡部には夫としての〈義務〉が課せられ、夫と

しての〈責任〉が発生する。それは岡部が軍隊時代に身につけた〈義務によりかかって怠ける〉のに類似している。岡部は兼子との擬似的な夫婦関係の上では夫としての〈義務と責任〉を果たさずればよかつたのである。しかし、岡部はそれに対して決して好意的なまなざしを持たない。むしろ兼子によって半強制的に課せられた〈義務と責任〉であると理解して、兼子との生活から脱出しようとする。それは他者に課せられた〈義務と責任〉の放棄であり、自らの自発性を必要とする世界への逃避に他ならない。

岡部が陽子に惹かれたのも、岡部と陽子との関係が〈義務と責任〉とは無縁の世界に展開されていたからである。

それからの一週間あまりを僕はほとんど陽子とすごすトリトメのな
い時間のために費してしまふことになった。毎日、多いときは一日
に数回の電話、そしてほとんど毎日、誘い合わせて出歩いた。

岡部は陽子と（トリトメのない時間）を過ごすことで、兼子との夫婦
関係から一見解放された生活を送ることに成功した。注目したいのは、
岡部は陽子と性交した際、〈純粹に「よろこび」というもの〉を得るだ
けで嫂との性交後を感じた〈慙愧と羞恥と自己嫌悪〉や兼子との行為の
直前に抱いた〈空白感〉を抱いていない点である。これは、嫂との場合
とは異なり岡部が〈責任〉のない関係の上に陽子との関係を構築したと
理解していたからであろう。岡部が〈責任〉を負わないことに喜びを感
じるのは、陽子との場合だけではない。金策のためK海岸に戻り〈翻
訳〉の仕事をする岡部は、自身が翻訳したものは奥村氏の名前で出版さ
れ〈あわただしく読みすてられて行く〉と言いながら、その仕事を〈精

神の半舷上陸」と呼ぶ。

しかしそんな稀薄なもので自分が社会とつながっているということ
に僕は或るころよさを感じるものだ。徹夜して書き上げた原稿が
誰かの手に吸い上げられて、何枚かの紙幣になってもどってくる。
こういうことには皮肉なよろこびがある。……仕事のペースが着実
であればあるほど、精神の非番の部分も活潑にうごき出す。僕はま
だ何ものにも犯されていなかった少年時代を——ある朝雪におおわ
れて真白になった道をまっしぐらに駆け出したころの自分を、また
初めて海を見たときの内心の動揺や孤独な感慨を、そしてまた学校
のかえりみちに憑かれたように一匹の蛇を追いまわしたあのころを
——しきりに夢想した。それは爽やかな風と光を背景にした夢だ。

岡部の〈翻訳〉は他者の名で発表されるために岡部に〈責任〉は伴わ
ない。〈責任〉から解放された地点で〈社会とつながっている〉ことは
岡部にとって〈何ものにも犯されていなかった少年時代〉を想起するも
のであった。しかし、岡部にとって〈少年時代〉の〈海〉は、〈夏休み
の宿題〉に象徴される〈責任〉と切り離されないことに岡部自身は無自
覚であった。〈翻訳〉の仕事も金銭が発生する限り〈責任〉が伴う作業
であるはずである。〈責任〉から解放された地点から感受する〈何もの
にも犯されていなかった少年時代〉は岡部の錯覚であり、そのために
〈翻訳〉の仕事は継続できない。それでも岡部の自覚の上では、陽子以
外の他者とも〈責任〉のない関係を築こうとするのである。

〈義務と責任〉によって他者との関係を築く岡部に対して、兼子が提
示したのはそれから解放された新たな関係性である。陽子との関係のた

めに、岡部には金銭が必要であった。しかし、岡部は所持金を使い込み、兼子にそれが明らかになると兼子は「あたし、あなたを養子にもらうことに決心したわ」と言い渡す。親子関係であれば、子の役である岡部に夫としての〈義務と責任〉はなくなる。兼子は岡部との関わりを夫婦関係から親子関係へと変換させることで、岡部に〈義務と責任〉を負わせないようにしたのである。兼子は岡部と二度、異なる形で新たな家族関係を構築しようとしたと言える。岡部は兼子のその提案を一旦は受け入れるが、母親のように振る舞う兼子に対して「君が心配しないでいい。ほっといてくれ」と言い、自身の行動を次のように振り返っている。

——この日の僕は、駄駄をこねる子供のようだったろう。しかし兼子とはこれで、お別れだ。……戦わなくてはならない、勝つまで戦わなくてはならない。先ず兼子と別れること、次にはどんな手段を講じてでも経済的に自立すること、この二つが先決問題だ。

親子の関係であれば、子は一切の〈責任〉から解放され、性的な結びつきも解消される。〈兼子と別れること〉とは、夫としての〈義務と責任〉を失ってもなお岡部と関係を築こうとする家族との決別である。しかし、岡部は〈義務と責任〉から離れた地点で自身を必要とする兼子との関係ではなく、〈自分の意思から出発した〉〈義務〉を自ら課すことで成立する陽子との関係を選択したのである。

他方で、岡部と陽子との関係性は兼子との夫婦関係解消と同時期から変化が見られる。岡部と陽子は出会った当初は〈責任〉が伴わない関係であったはずであった。ところが兼子から親子関係を提案され、夫とし

ての〈責任〉から解放された岡部は、陽子の父親的な役割を率先して果たそうとする。陽子はそもそも〈バア〉の女であり、岡部は客である。その関係の特性上、陽子は当然岡部に金銭を求める。岡部と陽子は、岡部に陽子が金銭を要求する新たな関係へと展開していくが岡部はそれに對して肯定的である。

やっても、やっても、やりおわることのない努力。それはたしかに苦役そのものだ。

煉瓦の山を、あちらからこちらへ、こちらからあちらへ、と果てもなく移動させる作業。

しかし、やっているうちにはそんなことにも、一つの永続的な仕事をしているという落着きが生じるのではないだろうか。僕の場合、陽子に金をあたえることが、養わなければならない親兄弟を背負っている感じだ。自分の意志から出発した虚構の義務感、それが今では生れついでに運命にそのままピタリしてきたということだ。

岡部は兼子に与える金銭を工面する行為を〈苦役そのもの〉と言い表しつつ、それが〈自分の意志から出発した虚構の義務感〉によるものだと理解する。すなわち、岡部は兼子との夫婦関係という〈義務と責任〉から逃れ、陽子と〈義務と責任〉から解放された関係を築きながら、一方で率先して新たな〈義務〉を自らに課そうとするのである。ここで言う新たな〈義務〉とは、軍隊生活で課せられた〈将校〉としての〈義務と責任〉とも、兼子と築いた夫としての〈義務と責任〉とも異なるものである。陽子との関係の上では、それは〈将校〉や〈夫〉といった役割によって課せられるものではなく〈自分の意志から出発した〉〈義務〉

であった。この時、岡部にとつて〈義務と責任〉は他者に課せられたものではなく、〈自分の意志から出発した〉自発性のものである必要があったのである。思えば、嫂との性交も兼子との共同生活も岡部の自発的なものではなかった。岡部は陽子との関係を〈自分の意志から出発した〉〈義務〉によつて成立させることで、初めて自身の可能性の発見を見出した。

このように岡部は陽子との場合に自らに課した〈義務と責任〉をそれまでのものとは別のものとして理解する。しかしそれは〈義務と責任〉である限り放棄することはできない。岡部の自覚とは異なり、実際には岡部は陽子とも、自らに〈義務〉を課すことでまた〈義務と責任〉によつて結ばれた関係を築くことになる。換言すれば〈自分の意志から出発した〉か他者によつて課せられたかに関わらず、岡部の他者との関係は常に〈義務と責任〉を媒介とし構築されるのである。

三.

岡部は金策のため長兄がいる大阪へ向かう。そこで再会した嫂は、岡部との性交を長兄に打ち明けたと言ひ、さらには長兄はその事実を知っていたという。岡部は嫂に対して「裏切られた」実感²を覚えながら、長兄の振る舞いを回想する。

そしてまた兄は、どういふつもりで黙って僕らを許したのか、そのことを考えると、さつきまで対坐していた兄の顔が不気味なほど冷いものとして想い出される。……しかし、それと同時に僕は、じつにおかしな解放感にひたされていることも事実だった。たとえば長

い行軍の小休止に背囊を下ろしてみても初めて背中の荷の重さがかつたのだが、しかもその背囊はあけてみると中身はカラッポだったという風な……。

岡部にとつて嫂との行為は、当初〈慙愧と羞恥と自己嫌悪〉を感じるべき行為であったが、嫂の隠蔽により岡部の自意識では霧消したはずのものであった。しかし、すでに見た通り兼子との関係は宙吊りにされた嫂との〈責任〉が促したものであり、陽子との関係は兼子との〈義務と責任〉が生じる関係からの脱走によつて開始したものであった。このように、岡部が他者との関係を〈責任〉の上に成立させていたのは岡部が無意識のうちに嫂との行為による〈責任〉を忘却できてはいなかったことを意味している。

岡部に対して、嫂は隠蔽したが長兄はその性交自体をそもそもなかったものとして振る舞う。岡部は長兄に自身が〈背囊〉のように背負い続けた〈責任〉を他者にとつては〈カラッポ〉で無意味なものであると間接的に言い渡されたのである。重要なのは、岡部が捉われ続けた〈責任〉を否定したのが嫂ではなく家族である長兄であるという点である。一家の中心にいるはずの長兄に否定されたからこそ、岡部は第二の家で家長のように振る舞っていた兼子がいるK海岸の家へ〈もどつてみたくなった〉のである。しかし、岡部はM岳入りを決定づける事実を次兄から言い渡される。岡部は次兄から、兼子と奥村氏が〈温泉マーク〉に入つたことを知らされたのである。そのとき岡部は〈茫然自失の状態〉になる。

僕は自分が、はじめて茫然自失の状態であることを知った。白木の

テーブルの上には、酒がいっぱい注がれた盃がある。中から魚の骨の突き出た味噌汁の茶碗がある。そして黒いベレをかぶった兄の口許には茶碗むしの玉子がついている。……僕はまるでたしかめでもするように、眼の前にあるそんなものを眺めてみた。すると、どうしたことが一瞬、いまだかつてなかった恐怖心そのもののような感覚が、それらのものからやってきて僕の全身を浸していった。

岡部は自ら兼子との関係を解消しようとしたはずであった。それでも、兼子と奥村氏の性的関係を知ると（いまだかつてなかった恐怖心）が岡部を襲った。岡部にとって兼子との関係は自ら否定しながらも親子という（義務と責任）とはかけ離れた場所で築かれているものであった。その瞬間、岡部は様々な役割から解放された唯一無二の存在となり得た。しかし、母役である兼子は社会通念としての（義務と責任）を放棄し、世間の目を憚る行為をしていた。その上、その行為は岡部との関係が開始する起因となった性的な行為であったのである。岡部が長兄から否定され大阪から帰京した際に東京ではなくK海岸の自宅に帰り、兼子の帰宅を待っているところを見ても、岡部が疎ましく思いつつも、無自覚のうちに兼子を家族として見做していたことは明らかである。岡部にとって兼子のその行為は家族の裏切りであり、岡部は（恐怖心そのもののような感覚）に襲われる。

そのとき、岡部が思いついたのは兼子ではなく陽子との約束を故意に（とちがえ）という（悪戯）をすることであった。（銀座）の喫茶店を指定しながら（新宿）の喫茶店で陽子を待つ岡部は再び（海）を思い出す。岡部のこの行為は、いまや岡部の（義務と責任）に成立する陽子との関係を、自らの嘘によって破壊しようとしていること、さらにはこ

こでも岡部の自覚の上では（海）なる自発性は（義務と責任）から切り離された地点に生まれていることを示している。

（海）を想像しながら（僕は不意にある悪戯を想いついた）。それこそがM岳への入山である。

その時だった。僕は不意にある悪戯を想いついた。——これから出掛けてやろう、陽子にだけ別れの挨拶めいたものを送って置いて、誰にも知られない遠くの方へ……。

ちょうど、いま僕がことさらに取りちがえた場所で陽子を待つために待っているように、もつとフィクショナルな場所で彼女を待つことにしよう——。

岡部にとってM岳入りは（ある悪戯）に過ぎなかった。しかし、同じく（悪戯）であった喫茶店の場合と異なるのは、陽子への発言通りに実際に入山する点である。喫茶店で陽子との約束を反故にし一瞬（海）を再び獲得した岡部は、陽子を騙すための嘘を現実にすることで陽子と新たな関係を築こうとしたのである。M岳は、岡部にとって自身を取り巻く家族などから離れた地点でありながら、あくまでも（フィクショナルな場所）であった。それは（義務と責任）の上に成立する現実とは異なる（フィクショナルな場所）であり、言い換えれば、岡部は（義務と責任）から解放された地点を（フィクショナルな場所）でしか構築できなかったのである。岡部はそこから逃げ出そうとしながらも、他者との関係を（義務と責任）なしに築けないからである。

M岳で岡部は陽子の幻像を見、「陽子！」と叫び求めるも（僕と彼女の距離は一向にちぢまらない）。岡部はついにM岳という（フィクシヨ

ナルな場所)でさえ、陽子を獲得できないのである。

おわりに

岡部は他者との関係を(義務と責任)の上にしか成立させられないも関わらず、最後までそれに無自覚であった。岡部の(海)は(夏休みの宿題)とともにしか実現し得ないのだから、岡部にはその(義務と責任)のもとでしか(海)は出現しない。それにも関わらず岡部は、分かち合いがたく結びついている(夏休みの宿題)と(海)のうち、後者のみを獲得しようと奔走し、失敗する。岡部が獲得しようとした(海)とは、岡部にとっては(魅せられたような心持)も発生させる場であり、(夢)であり(孤独な感慨)であった。それは嫂との場合は情慾という形で表れ、陽子との場合は自発的な(義務と責任)によって見出されると岡部は理解していた。

陽子の弟の就職先幹旋を頼まれた岡部は、陽子との関係から(人間同志のつながりというのは結局「責任」でしかないのだろうか)と疑いながら、人生を見つめる。

——生きることそれ自体のほかに、生きる目的があるだろうか。人の生のかなかに、ときどき瞬間的にあらわれる「至福」の感覚があり、僕はそれを待ちうけている。しかし、それは努力の結果であたえられるものではなく、生活の仕方と関係のあるものでもない。日常生活はそれ自体の法則で流れて行くばかりだ。そのなかに突然、異質なものがあらわれて、それが僕らの日常茶飯からぬけ出した人生をつくって行くことがあるとしても、結局それも僕らの意志で、それ

を引きのばすわけにはいかない。しかし、それなら僕らは何に向って努力すればいいのだろうか。「責任」をはたすことだろうか。借金のアナをうめることだろうか。ただし、そんなことは僕にはやっぱり人生に附随した盲腸のようなものだとしか思えない。

岡部がここで言う「至福」とは情慾や自発性や(海)を指す。岡部にとってそれは自らの手で獲得しようするものではなく偶発的に手に入れられるものでしかなかった。それでは、その偶発的な「至福」獲得を諦め他者との関係において課せられた(責任)を果たすことに奔走できるかといえ、それもまた岡部にとっては(人生に附随した盲腸のようなもの)でしかない。服部達はそれを(卑小なる自我)と呼んだ。そもそも(義務と責任)と「至福」とが結びつけられていることが岡部の独自の視点であるし、錯覚である疑いも残されている。

安岡が本作品に描き出そうとした(戦争によって内心に欠落したもの)もまた、「至福」を自ら獲得しようする意志ではないだろうか。岡部は(少年時代)の(海)を再び入手しようともがきながらも、同時に結局はそれが自らの意志によって創造されるものではないという諦念に覆われている。この諦念を安岡は(戦争によって)生じたものだという。「舌出し天使」は一見単なる個人の体験に過ぎないが、そこには戦争の影響が垣間見える。安岡の言説のように、この諦念が安岡の同時代人全般に共有されたものだとは断定することは困難である。しかしながら、戦争体験とこの諦念の関連性はこれまで劣等生の文学とされてきた安岡文学や「第三の新人」文学の新たな理解への一端となるだろう。

- (1) 初出「舌出し天使」(「群像」四月号、昭和三三・四、講談社)、初刊『舌出し天使』(昭和三三・七、講談社)。なお、本稿における本文引用は全て『安岡章太郎集』第五卷(昭和六一・八、岩波書店)に依った。
- (2) 安岡章太郎『遁走』(昭和三三・十二、講談社)
- (3) 安岡章太郎『海辺の光景』(昭和三四・十二、講談社)
- (4) 関谷一郎「服部達小論——吉本・江藤の先行者」(『国文学 解釈と鑑賞』第七二卷、平成十八・二、至文堂)
- (5) 安岡章太郎『戦後文学放浪記』(平成十二・六、岩波書店)
- (6) (5)に同じ
- (7) 服部達「劣等生・小不具者・そして市民」(『文學界』九月号、昭和三十・九、文藝春秋)
- (8) (5)に同じ
- (9) 平野謙「解説」(『新日本文学全集』第三五卷、昭和三八・五、集英社)